

オーラルヒストリー活動の在り方 調査専門委員会

設置趣意書

電気技術史技術委員会

1. 目的

電気技術史技術委員会では、1993 年以降、順次調査専門委員会を設置し、電気技術の各分野の専門家や電気学会名誉員を対象としてオーラルヒストリー活動を進めてきた。

しかしながら、コロナ禍またはアフターコロナにおけるインタビュー方式、限られた予算の中でのアウトプットのありかたなどの議論が必要である。そこで、「オーラルヒストリー活動の在り方 調査専門委員会」では、以下の調査などの目的として活動する。

- 1) オーラルヒストリー活動手順の議論
- 2) 音声テキスト化ソフト／アプリの調査
- 3) 活動手順書の作成
- 4) テストインタビューの実施

2. 背景および内外機関における調査活動

- 1) 理工系におけるオーラルヒストリーは、研究開発関係者から聞き取り調査を行い、研究開発過程などに加え、論文などには記載しない内容、すなわち、関係者の心の交流や人間関係、研究開発秘話などを聞き取って記録に残し、技術史研究の一次史料とするものである。
- 2) 近年、オーラルヒストリーが技術史研究の手法として有力なものであることが認識され、国内外の多くの機関で聞き取り調査が実施されている。
- 3) 国内では、当電気技術史技術委員会の他にも、社団法人研究産業・産業技術振興協会、自動車技術会、映像情報メディア学会、応用物理学会、計測自動制御学会、情報処理学会、照明学会、電子情報通信学会など多くの学会・協会が取り組んでいる。
(注)映像情報メディア学会以降に記した学会は、当学会の主唱により設立されたオーラルヒストリー研究推進委員会(科研費終了とともに解散)のメンバー。
- 4) 海外では、教育機関、専門機関、企業、個人といった種々のレベルの聞き取り調査が実施されている。特に IEEE 歴史センターの調査が有名で、調査記録はスミソニアン協会、IEEE 歴史センター、チャールズ・バベッジ研究所等に保管され、また、最近ではウェブサイト”The Engineering and Technology History Wiki (ETHW)でも公開されており、技術史研究に有効活用されている。

3. 調査検討事項

以下について調査検討・決定を行う。

- 1) オーラルヒストリー活動手順の議論
- 2) 音声テキスト化ソフト／アプリの調査。
- 3) 活動手順書の作成
- 4) 調査原資料(録音媒体、記録文書など)他の管理方法の検討
- 5) テストインタビューの実施

4. 予想される効果

- 1) オーラルヒストリー活動手順を整備し、継続的な活動が可能となる。
- 2) 電気技術史研究の貴重な史料を得ることができる。
- 3) 後進の若い研究開発者の研究開発上の指針や姿勢に好影響を与えられる。

5. 調査期間

令和4年(2022年)4月～令和7年(2025年)3月

6. 委員会の構成（職名別の50音順）

職名	氏名	(所属)	会員・非会員区分
委員長	中村 格	(鹿児島工業高等専門学校)	会員
委員	雨宮 高久	(日本大学)	非会員
同	市原 博	(獨協大学)	非会員
同	岡本 達希	(関東学院大学)	会員
同	加納 敏行	(日本電気)	会員
同	境田 慎一	(日本放送協会)	会員
同	白坂 行康	(日立製作所)	会員
同	高橋 玲子	(東芝エネルギーシステムズ)	会員
同	中村 秀臣	(科学史技術史研究所)	会員
同	前島 正裕	(国立科学博物館)	会員
同	松本 栄寿	(日本計量史学会)	会員
同	皆川 忠郎	(三菱電機)	会員
同	村上 徹	(JR 東日本研究開発センター)	会員
同	山口 順一	(香川大学)	会員
幹事	丸島 敬	(東芝エネルギーシステムズ)	会員

7. 活動予定

委員会：4回／年

8. 報告形態

本委員会の調査結果は、全国大会のシンポジウムにて報告する。

(理由)

報告形態を全国大会シンポジウムとすることによって、本委員会の調査結果を含めた電気技術史技術委員会で20年以上にわたって進めてきたオーラルヒストリー活動に多岐の技術者・研究者が触れることで、その有益性を深く理解することができ、電気学会のプレゼンス向上につながる。さらに、本活動の史料閲覧のための学会入会の増大が見込め、学会への貢献が期待できる。

以上